

レフ・トルストイの『戦争と平和』における無為の描写

覚張シルビア

はじめに

『戦争と平和』に着手する前、トルストイは、流刑先から帰還するデカブリストを主役に小説を構想していた。しかし、小説の舞台は作家の同時代からデカブリストの乱が起こった1825年へ、そしてデカブリストが青年時代であった1812年へと遡る。さらには、ロシアのフランス軍に対する勝利のみを描くことを潔しとせず、ロシアの不遇の時代も書く必要性を感じ、1805年を起点として、後に『戦争と平和』となる小説を書き始めたのである。¹当初、トルストイは、農民の解放と民衆の生活の改善、専制政治の打倒のために闘うデカブリストを高く評価していた。²そのことから、作家が変革期を迎えた混沌する時代の本質を捉えるべく、この小説に着手したことが窺える。

『戦争と平和』は、一見すると過去に取材した歴史小説の体裁をとっているが、登場人物の多くに、作家の近親者や同時代の人物の特徴が見出される。そして、歴史的な大事件や人物、時代の雰囲気伝える社交サロンの描写と並んで、主人公達の無為な生活が描かれている。しかし、この無為な生活は、歴史的描写と同様の、時にはそれ以上に重要な意味を持ち、その歴史的背景とは何ら関係を持たないようでありながら、作家の歴史観に密接に関わっている。

トルストイは、この長編の中で、歴史家が後になって記すように、傑出した人物が歴史を作るのではなく、多様な人々の意志と現象の偶発的な積み重ねによって歴史が形成されていくという独自の歴史観を提示している。一般的な歴史家の観点からすれば、目的を持って行動する傑出した人物が時代の潮流を作っていくわけであるが、トルストイによれば、独自の利害に従って動く多くの人々の行為の総体の結果として、歴史が出来上がる。つまり、歴史が誰か一人の意図により、何らかの「具体的な目的」のために形成されたのではないということになる。登場人物達の無為を、文字通りに行為を行わないことだけではなく、「具体的な目的を持たない行為」と考えれば、これら「平和」に相当する場面が、トルストイの歴史観に密接に関わる、つまり、歴史小説に必要な場面であると考えら

¹ Толстой Л.Н. Полное собрание сочинений в 90 томах. М., 1992. Т. 13. С. 54.

これより先、本稿におけるトルストイ 90 巻全集からの引用は (巻数, 頁数) によって示す。『戦争と平和』からの引用の和訳は著者によるが、適宜、藤沼貴訳『戦争と平和』(岩波書店, 2006 年) を参照した。

² Толстая С.А. Моя жизнь. Т. I. М., 2011. С. 94.

れる。

本論では、「具体的な目的を持たない行為」としての意味も含めた無為や戯れに焦点を当て、それが小説の中で持つ意味合いを考察する。

1. 行為と目的

ゲオルギー・レスキスは、クラーギンの世界とロストフの世界を比較しつつ、アンナ・シェーレル女官のサロンには、息子を良い職に就けようとか、軍隊から親衛隊に転任させようという何らかの目的を持って人々が集まるのに対して、ロストフ家の名の日のお祝いへの出席者は、食事や会話を心から楽しんでいることに着目している。³ 冒頭で、シェーレル女官のサロンを最初に訪れるワシーリー・クラーギンの行動は、意図せずして、常に何らかの目的を孕んでいることが、作者によって強調されている。

Князь Василий не обдумывал своих планов. Он еще менее думал сделать людям зло для того, чтобы приобрести выгоду. Он был только светский человек, успевший в свете и сделавший привычку из этого успеха. У него постоянно, смотря по обстоятельствам, по сближениям с людьми, составлялись различные планы и соображения, в которых он сам не отдавал себе хорошенко отчета, но которые составляли весь интерес его жизни. Не один и не два таких плана и соображения бывало у него в ходу, а десятки, из которых одни только начинали представляться ему, другие достигались, третьи уничтожались. Он не говорил себе, например: «Этот человек теперь в силе, я должен приобрести его доверие и дружбу и через него устроить себе выдачу единовременного пособия», или он не говорил себе: «Вот Пьер богат, я должен заманить его жениться на дочери и занять нужные мне 40 тысяч»; но человек в силе встречался ему, и в ту же минуту инстинкт подсказывал ему, что этот человек может быть полезен, и князь Василий сближался с ним и при первой возможности, без приготовления, по инстинкту, льстил, делался фамильярен, говорил о том, о чем нужно было. (9, 245)

ワシーリー公爵は、よく考えて計画を立てるようなことをしなかった。ましてや、自分が利益を得るために、人々に害を及ぼそうなどは考えもしなかった。彼はただ、社交界で成功し、その成功が慣習となった上流社会の人間であるに過ぎなかった。彼の中では常に、状況に応じて、また人々と親交を結ぶたびに、様々な計画やもくろみが生まれてくるのであった。彼自身は、それをよく自覚していなかったものの、それこそが、彼の生活上の全関心をなしていたのである。しかも、彼の中で進行中の計画やもくろみというのは一つや二つではなく、数十とあり、その中には、まだ思い浮かんだばかりのもの、すでに達成されつつあるもの、そして消え

³ Лесский Г.А. Лев Толстой (1852-1869). М., 2000. С. 564.

つつあるものがあつた。彼は、例えば、「この人には権力があるから、その信頼と知遇を得て、この人を通じて一時金を交付してもらおう」とか、「ピエールが金持ちになったから、娘と結婚するよう仕向けて、必要な4万を借りよう」と自分に言い聞かせることはなかつた。ただ、権力を持つ人に会つると、その瞬間に、本能がこの人は役に立つかもしれないと示唆し、ワシーリー公爵は、その機会が訪れると、事前の準備もなく、ただ本能によって、その人と親交を結び、へつらい、なれなれしい態度をとり、然るべきことを話すのであつた。

一方、同じサロンの訪問客であるピエール・ベズーホフは、他の訪問客とは違い、「賢い会話 (умный разговор)」に参加する以外の目的を持っていない。

Он нигде не служил еще, только что приехал из-за границы, где он воспитывался, и был в первый раз в обществе. <...> Но, несмотря на это низшее по своему сорту приветствие, при виде вошедшего Пьера, в лице Анны Павловны изобразилось беспокойство и страх, подобный тому, который выражается при виде чего-нибудь слишком огромного и несвойственного месту. (9, 11) 彼はまだ、どこにも勤務しておらず、教育を受けていた外国から帰国したばかりで、社交界に出たのも初めてだった。[中略]しかし、その挨拶の等級の低さに反して、入って来たピエールを目にしたアンナ・パーヴロヴナの顔には、何か異様に大きくてその場に相応しくないものを見た時のような不安と恐怖が表れた。

外国から帰国したばかりでまだ勤務せず、社会の利害関係とは無縁な存在であるピエールは、シェーレル女官が築き上げる「紡績工場」の秩序を破壊しかねない人物として恐怖の念を抱かせる。まさに目的を持たないことによって、表面的・儀礼的な会話のみが許される「場に相応しくない」印象を与えるのである。ピエールがベズーホフ家の莫大な遺産の相続者となると、クラーギンは、このピエールを娘のエレンと結婚させて勢力下に置こうとするが、そのために最初にやったことは、侍従 (камер-юнкер) の地位に据えることであつた。利害関係とは無縁の人物に、利害関係が生じ得る「職」または「地位」といった環境を提供することで、そうした関係を築くことを可能にする素地を作つたといえよう。

クラーギン公爵の息子のアナトールや娘のエレンは、社会的な利害関係とは無縁の生活を送っているようにも見えるが、いずれも、不十分ではありながら父親の利害に合致した行動をとる。アナトールは父親と共に、マリヤ・ボルコンスカヤとの縁談のためルイスィエ・ゴールイを訪問するが、この実現しない結婚のうちに、魅力的なブリエンヌの存在という目的を見出す。エレンもまた、親の要求通りにピエールと結婚し、贅沢で放埒な生活を楽しむのである。

真の感情に忠実なロストフ家では、客間に無作法に駆け込んで来るナターシャこそが空

気の支配者となる。そこでは、主人と表面的かつ儀礼上の会話に興じる客も、常に理性的で感情を伴わない言葉を発する長女ヴェーラも異質な印象を与えるばかりだ。

2. 無為と戯れ

表面的な儀礼が重んじられるペテルブルグのサロンで異質な存在となるピエールと、誠実さや率直さこそが人を測る基準となるロストフ家の雰囲気を実際上支配するナターシャ・ロストワは、その行為の動機を十分に説明できないという点で似通っている。

読者は、ロストフ家の客間での噂話を通してピエールの愚行、つまり、アナートルやドーロホフと共に区警察署長に熊を縛り付けて川に流したことを知るが、常に放蕩な生活に満足を見出すアナートルと既成の秩序の崩壊に生きる意味を見出すドーロホフに対し、ピエールの行為を動機づけることはできない。

父ベズーホフが死の床にあり、周囲の者がその財産相続をめぐる争い、奔走している時にも、彼は、ただ他者の意図に従うばかりで自分の意図を持って行動することはない。ピエールは息子ボリスの利益のために行動するドルベツカヤ夫人と共に、自宅のなぜか裏口へ乗りつける。

Стало-быть, это так нужно, решил сам с собой Пьер и прошел за Анною Михайловной. Анна Михайловна поспешными шагами шла вверх по слабо-освещенной узкой каменной лестнице, подзывая отстававшего за ней Пьера, который, хотя и не понимал, для чего ему надо было вообще идти к графу, и еще меньше, зачем ему надо было идти по задней лестнице, но, судя по уверенности и поспешности Анны Михайловны, решил про себя, что это было необходимо нужно. (9, 92)

つまり、こうあるべきなんだ、とピエールは思い込むと、アンナ・ミハイロヴナに続いて中に入った。アンナ・ミハイロヴナは、遅れてついて来るピエールを呼び寄せながら、照明の不十分な細い石段を急ぎ足で登って行った。ピエールの方は、そもそもなぜ彼が伯爵のもとに行かなければならないのか分からなかったし、ましてや、なぜ裏階段を通らねばならないのかも分からなかった。ただ、アンナ・ミハイロヴナの確固とした、また急いでいる様子からきつこうあるべきなのだ、と思い込んだ。

彼は、父親の遺産と自身との関係について無頓着であり、遺産を相続するために何かを為すべきだとは想像すらしてしない。ただ、利用しやすいピエールを相続人とする目的で行動する他者に、その意図も知らずに付き従うのである。このように、経済的利害に全く無頓着なピエールであるが、彼においては、その行動ばかりでなく、感情も動機づけでき

ない場合が多い。母親と共にベズーホフ家を訪問し、自分の部屋にやってきたボリスに対し、ピエールはいわれのない親しみを感じる。

Как это бывает в первой молодости и особенно в одиноком положении, он почувствовал беспричинную нежность к этому молодому человеку и обещал себе непременно подружиться с ним. (9, 67)

青春時代に、特に孤独な時にはよくあるように、彼は、この若者に対していわれのない愛情を感じ、絶対に彼と友達になろうと、自分自身に約束した。

彼がこの感情を抱いたボリスの方も同世代の青年ではあるが、貧しさゆえに利害とは無縁の行動をとれない状況にあり、それゆえにピエールと親しくすることを自尊心が許さない。その一方で、この時点では、ピエールも死につつあるベズーホフ伯爵の財産相続人とはまだなっておらず、地位も保証されていないため、彼が利害感情を持たないことを、その家柄に帰することはできない。それゆえ、この理由のない優しい気持ちを単に年齢や立場特有の性質とみなすことはできず、「いわれのない」気持ちはむしろピエール独自のものだといふべきである。

作品全体を通して見ても、ピエールを特徴づけるのは、その受け身な姿勢である。結婚や決闘といった、普通は強い意志を持たずしては成し遂げられない事柄に直面しても、彼のうちには目的や意図といったものが全く感じられない。エレンとの結婚は、彼女の父クラーギンの意志によってのみ成立し、ピエールはただ、「万事、こうなるべきだったのだろうし、こうなるよりほかなかったのだ、[中略] だからこれでよいのか悪いのか、問う必要はない。もうはっきりとして、以前のような苦しい疑念がないのだから、よいのだろう (Всё это так должно было быть и не могло быть иначе, <...> поэтому нечего спрашивать, хорошо ли это или дурно? Хорошо, потому что определено, и нет прежнего мучительного сомнения)」(9, 261)と考えて状況を受け入れるばかりである。そして、彼が、「こういう場合には、何か特別なことを言うものだ(Что-то такое особенное говорят в этих случаях)」と考えつつ、特別な言葉をすぐに思い出せないことにも、彼の結婚という行為が、全く動機を持たないことが窺える。

ピエールは、妻との関係を示唆して挑発してきたドーロホフに対し、自ら決闘を挑むものの、決闘の最中には、動機づけのできない行動をとる。ドーロホフを意図せずして撃ち、怪我を負わせると、彼は、今にも泣き出さんばかりなのを抑えつつ、駆け寄ろうとする。そして、ドーロホフに狙われても身を守ろうとすらしめない。

クラーギンのように動機を持って行動する人物たちにとっては、表面的な社交上の会話や愛想笑いまでもが目的を持つ行為の一部を成す。その意味において、彼らは常に行為す

る人間だということができる。それに対し、ピエールのように利害という動機をもたない者たちは、むしろ無為という言葉によって特徴づけることができよう。

ピエールが常に利害に関わる目的を持って行動しない、つまり無為の状態にあるのと同様に、ナターシャもまた、目的を持つ行為とは無縁である。彼女の振舞いは、突然部屋に飛び込んできたり、馬車の前に突然駆け出してきたり、空を飛ばうとしたり、または歌を歌い、踊りを舞う、さらには無意味な会話をする、という具合にその無意味さで際立っている。そのすべての振舞いは、静的なピエールの無為に比べると動的であり、常に戯れている印象を読者に与える。それは、彼女の男性に対する態度にも見て取れる。子供時代の恋人であったボリスが再びナターシャにのぼせてしまい、意志とは無関係に彼女の家に通い始めると、母親は娘をたしなめる。

- ... Но вот что, Наташа, я поговорю с Борей. Ему не надо так часто ездить...

- Отчего же не надо, коли ему хочется?

- Оттого, что я знаю, что это ничем не кончится.

- Почему вы знаете? Нет, мама, вы не говорите ему. Что за глупости! – говорила Наташа тоном человека, у которого хотят отнять его собственность. – Ну не выйду замуж, так пускай ездит, коли ему весело и мне весело. - Наташа улыбаясь поглядела на мать.

- Не замуж, а *так*, - повторила она. (10, 193)

「……だけどね、ナターシャ、私がボーリヤと話してみるわ。こんなに頻繁に通って来るべきじゃないとね……」

「どうしてだめなの、彼はそうしたいのに」

「こんなことしても何もいいことはないと分かっているからよ」

「どうして分かるの。いいえ、ママ、彼には言わないで。何て馬鹿げてるのかしら」とナターシャは自分の物を取り上げられそうな人特有の調子で言った。「結婚はしないにしても、彼も楽しくて私も楽しいなら、来ればいいじゃないの」とナターシャは微笑みながら母親の方を見た。「結婚するわけじゃないけど、ただ何となくよ」と彼女は繰り返した。

この「ただ何となく (*так*)」という言葉に、ナターシャの戯れるような人生に対する態度が如実に現れている。

3. 1812年

ピエールの無為とナターシャの戯れのような人生は、ロシアが危機的な状況に置かれる

祖国戦争という非常時でも変わらないが、その質は確実に変化している。

アナートルとの駆け落ちに失敗した後、彼女は教会で祈りを捧げることで、精神的にも回復していく。痩せて、以前のような快活さを失った彼女は善良さという特質を自覚し始める。しかしながら、ナポレオン軍がモスクワに迫り、住民がモスクワ放棄の準備に奔走する頃には、特殊な事態の影響で快活さを取り戻している。

Петя и Наташа, напротив, не только не помогали родителям, но большею частью всем в доме надоедали и мешали. И целый день почти слышны были в доме их беготня, крики и беспричинный хохот. Они смеялись и радовались вовсе не оттого, что была причина их смеху; но им на душе было радостно и весело, и потому всё, что ни случалось, было для них причиной радости и смеха. <...> Наташа же была весела потому, что она слишком долго была грустна, и теперь ничто не напоминало ей причину ее грусти, и она была здорова. <...> Главное же, веселы они были потому, что война была под Москвой, что будут сражаться у заставы, что раздадут оружие, что все бегут, уезжают куда-то, что вообще происходит что-то необычайное, что всегда радостно для человека, в особенности для молодого. (11, 303-304)

ペーチャとナターシャは逆に、両親を手伝わなかったばかりか、大方、家の者たち皆の邪魔をし、うんざりさせていた。そしてほぼ一日中、家では彼らの駆けずり回る音や叫び声、理由のない笑い声が聞こえていた。彼らが笑ったり喜んだりしていたのは、全く理由があつてのことではなかった。彼らの心が喜ばしく、楽しかったから、起こることすべてが喜びと笑いの理由となったのである。[中略] ナターシャが楽しかったのは、彼女はあまりに長いこと悲しみに暮れていたが、今ではもう悲しみの原因を思い出させるようなものは何もなく、健康であったからだ。[中略] 何よりも、彼らが楽しかったのは、モスクワ近郊で戦争があり、関所付近では戦闘が予定されており、武器が配られ、皆がどこかへ逃げようとし、とにかく何か尋常ではないことが起こっていたからであり、そうしたことは常に、人間にとって、特に若い人にとっては喜びだからだ。

快活さを取り戻したナターシャは、戯れるばかりで周りに迷惑ばかり掛けているが、一旦、仕事にとりかかると、誰よりも優れた能力を発揮する。ソーニャや召使たちが荷造りに苦慮していれば、高価な食器類のみ絨毯に包むことで問題を一举に解決し、また、確信を持って家財道具ではなく負傷兵のために荷馬車を差し出すよう、母親を説得して指示を与えるのである。この指示を与えに走る時も、ナターシャは、「鬼ごっこをする時のような素早い足取りで駆け出して(Наташа тем быстрым бегом, которым она бегивала в горелки, побежала)」(11, 316) いる。つまり、必要な仕事に対しても、彼女の戯れるような態度は変わらない。マルドフは、「献身(самоотречение)のために [中略] 自身のうちにある何

ものをも抑圧する必要はない。それは抑圧ではなく、自身のうちにある意識の力点を、生命の重心を移すプロセスである」⁴ というが、まさに、ナターシャは自己を抑圧せずして他者に貢献する人物であるといえよう。1812年までは、彼女の献身の範囲は近親者に限られていたが、この歴史的な時を迎えてその範囲が大きく拡大する。

1812年という時を迎えて、自由気ままな戯れの人生を送っていたナターシャは、その同じ戯れるような調子で、他者の必要とすることを、さらには国民全体が必要とする英雄的行為を簡単にやっつけてのける。さらに、マルドフは、「献身とは、積極的に生き続ける『個人』との内面的絶縁であり、自己犠牲とは違い、意志を伴う行為によって成し遂げられるのではなく、長く張り詰めた精神的成長の道を経て、『精神的誕生』の結果、獲得される」と続けている。⁵ ナターシャは、小説の冒頭から戯れによって他者に息を吹き込んできたが、アナートルとの一件の後、精神的刷新を経て、その戯れはより大きな範囲に、より道徳的かつ的確に力を及ぼしていく。

このナターシャの戯れの質的な変化の予兆は、すでに1812年の彗星を見上げるピエールの思惟のうちにも見出すことができる。

Было морозно и ясно. Над грязными, полутемными улицами, над черными крышами стояло темное, звездное небо. Пьер, только глядя на небо, не чувствовал оскорбительной низости всего земного в сравнении с высотой, на которой находилась его душа. При въезде на Арбатскую площадь, огромное пространство звездного темного неба открылось глазам Пьера. Почти в середине этого неба над Пречистенским бульваром, окруженная, обсыпанная со всех сторон звездами, но отличаясь от всех близостью к земле, белым светом, и длинным, поднятым кверху хвостом, стояла огромная яркая комета 1812-го года, та самая комета, которая предвещала, как говорили, всякие ужасы и конец света. Но в Пьере светлая звезда эта с длинным лучистым хвостом не возбуждала никакого страшного чувства. <...> Пьеру казалось, что эта звезда вполне отвечала тому, что было в его расцветшей к новой жизни, размягченной и ободренной душе. (10, 374-375)

外は寒く、澄みわたっていた。薄暗いぬかるみ道や、黒い屋根々々の上には暗い星空があった。ただ、ピエールは、空を見つめながらも、彼の精神が置かれていた高みと比べて、この世のものすべての忌まわしいほどの卑しさを感じることはなかった。アルバート通りにさしかかると、暗い星空の広大な空間がピエールの眼前に広がった。プレチースチェンスキー並木道の上空のほぼ真ん中に、満天の星に囲まれて、しかし、他のすべての星々に比べると地球に近い場所に、

⁴ Мардов И.Б. Лев Толстой на вершинах жизни. М., 2003. С. 103.

⁵ Мардов. Лев Толстой. С. 103.

白い光と、長い尻上がりの尾によって一際目立っている 1812 年の巨大で明るい彗星が、あらゆる惨禍とこの世の終わりの前兆だと言われたあの彗星が静止していた。しかし、長い尾がきらきら光るこの明るい星は、ピエールのうちにいかなる恐ろしい感情も喚起しなかった。[中略] ピエールには、この星が、新しい生に向かって開花し、和らぎ、元気づいた自分の心に呼応しているように思われたのだ。

アナトールとの一件を知ったピエールは、ナターシャによるアンドレイ公爵に対する裏切りを信じられないと同時に、彼女が妻エレンと同様に卑しく軽蔑に値する女性であると思わずにはいられない。しかし、ナターシャを慰めようとして思わず愛を告白した後、その快い印象のもとでこの空を見上げた時、彼には、地上の生が卑しいものと思われなかったばかりか、あらゆる惨禍と終末の象徴と言われた 1812 年の彗星が、生の刷新の感覚と呼応しているように感じられた。人を新しい生へと開花 (расцвести к новой жизни) させ、心を和ませ (размягчить)、元気づける (ободрить) というのはナターシャの日常的振舞がもたらす典型的な作用でもあり、まさにここから、ナターシャの生がアナトールとの一件を境に、1812 年という歴史的な次元へと昇華していくことを象徴するようだ。ポチャロフは、ピエールがフランス兵から女性を守ろうとする時の狂気じみた歓喜 (восторг бешенства) と、ナターシャが荷車を負傷兵に提供する行為のうちに、1812 年という時代背景による特殊な解放感、高揚感を認めている。⁶ しかし、ナターシャが日常から非日常を創出する能力の持ち主であることを考慮すれば、むしろ、1812 年という特殊な状況によって、周りの人間達がナターシャやピエールの次元に到達したというべきであろう。それによって、平和な時には他者の心を軽やかにする程度の意味しか持たなかった彼らの行為が、時代の性質に合致し、まさに英雄的行為となるのである。

人生そのものに直面するのを避けるかのように仕事に取り組むアンドレイ公爵とは対照的に、ピエールにおいては、「何のため (зачем?)」という恐ろしい疑問が仕事 (занятие) の最中に持ち上がる。ナターシャへの愛の告白後、この疑問は他の疑問や回答ではなく、ナターシャのイメージ (представление ее) に取って代わられる。ナターシャを思い浮かべることで、ピエールのうちに生の意味を問う一切の疑問が消え失せるわけだが、このこと自体、ピエールの思考が無為に陥ることを示唆するようだ。

彼は、1812 年の到来後も無為な生活を続けている。

Пьер всё так же ездил в общество, так же много пил и вел ту же праздную и рассеянную жизнь, потому что кроме тех часов, которые он проводил у Ростовых, надо было проводить и остальное

⁶ Бочаров С.Г. Роман Л. Толстого «Война и мир». М., 1987. С. 16.

время, и привычки и знакомства, сделанные им в Москве, непреодолимо влекли его к той жизни, которая захватила его. (11, 78)

ピエールは、相変わらず社交界に通い、相変わらずお酒をたくさん飲み、何もせずにぶらぶらと暮らしていた。というのも、ロストフ家で過ごす以外の残りの時間もやり過ごす必要があったからであり、モスクワで得た知人や習慣が、彼を虜にしてしまったこの生活に否応なく引きずり込んだ。

とはいえ、戦況について不穏な噂を耳にし、何か自分の人生をも転覆させるような惨事が起こると考えたピエールは、この状況と自分自身の関係を理解しようと試みる。彼は、フランス語の各アルファベットに数を当てはめる手法を用いると、L'empereur Napoléon と l'Russes Besuhof のアルファベットに相当する数の総和がそれぞれアンチキリストの象徴である 666 と符合することから、自分自身の存在に何か運命的なものを感じている。しかし、歴史的な大事件と自分との関係を紙上の計算によって導き出していること自体、行為というよりは無為に等しい。彼は入隊も考えるものの、平和を唱えるフリーメイソンの一員であるという理由からそれはしない。また、軍服姿で愛国主義を宣揚する者たちを目の当たりにして、入隊することに恥ずかしさすら覚えている。さらには、l'Russes Besuhof という名が 666 の意味を持つゆえ、自分がナポレオンの権力を食い止めるという偉業に参加する運命は定められたものであり、それゆえ、何かを企てなくとも、待っていれば事は成就できると考えるのだ。

Его любовь к Ростовой, Антихрист, нашествие Наполеона, комета, 666, L'empereur Napoléon и l'Russes Besuhof, все это вместе должно было созреть, разразиться и вывести его из того заколдованного, ничтожного мира московских привычек, в которых он чувствовал себя пленным, и привести его к великому подвигу и великому счастью. (11, 79)

彼のロストフに対する愛、アンチキリスト、ナポレオンの襲来、彗星、666、ナポレオン皇帝、ロシア人ベズーホフ、これらすべてが一体となって時を迎え、その姿を現し、彼がその虜となってしまうモスクワの習慣という袋小路のようなちっぽけな世界から、彼を連れ出し、大いなる偉業へ、大いなる幸福へと彼を導いてくれるはずであった。

こうしたことを考えながら、結局、ピエールは無為のままモスクワに留まる。ピエールは「この年に非常に太ったので、背がこれほど高くなければ醜いぐらい (за этот год так потолстел, что он был бы уродлив, ежели бы он не был так велик ростом...)」(11, 81) になっていたが、まるで、何もしないまま存在自体が 1812 年のピエールへと増大していくことが、「太る」という、行為ではなく状態の変化によって示されているようだ。

ピエールは戦場を訪れるが、戦うわけではない。見物に来たに過ぎないが、白い帽子と緑の燕尾服姿で負傷兵たちの注意的となり、彼自身がむしろ、見世物のような存在と化している。さらには、無頓着ゆえに軍人以上の勇敢さを見せ、戦場でも戦わずして中心的人物となることがある。ナポレオンがモスクワに侵攻し、住民たちがモスクワを去るなか、ピエールはそこに残り続ける。彼はそこで、火事の家に取り残された赤ん坊と女性を助けるなどの行動に及ぶが、目的であったナポレオンとの対峙は成し得ないまま、フランス軍の捕虜となる。ここで、モスクワの習慣という「抜け出し難い瑣末な世界」の囚われの身になっていたピエールは、歴史的でより大きな世界の捕虜へと転換する。そこで、「刑の執行」という名のもとに行われる人間同士の殺し合いを目の当たりにし、「宿命的な力（роковая сила）」によって精神的に委縮するピエールであったが、プラトン・カラターエフの「丸さ」に触れることでそれを克服することのできる生の力が、彼のうちで強まり増大していく。カラターエフは起床時に、「子供が起きておもちゃをつかむのと同じ具合に何かにとりかかる（взяться за какое-нибудь дело, как дети, вставши, берутся за игрушки）」（12, 49）が、このピエールに影響を与える人物も、ナターシャ同様、捕虜という条件下で子供が戯れるように生活していることが窺える。そしてピエールは、捕虜の身で何も為さないままに、自分という存在が、空をも内包しうる大きなものであることを理解していくのだ。

Высоко в светлом небе стоял полный месяц. Леса и поля, невидные прежде вне расположения лагеря, открывались теперь вдаль. И еще дальше этих лесов и полей виднелась светлая, колеблющаяся, зовущая в себя бесконечная даль. Пьер взглянул в небо, в глубь уходящих, играющих звезд. «И всё это мое, и всё это во мне, и всё это я!» думал Пьер. «И всё это они поймали и посадили в балаган, загороженный досками!» Он улыбнулся и пошел укладываться спать к своим товарищам. (12, 106)

明るい空高くに満月がかかっていた。以前は野當地の外で見えなかった森や野原が、今では遠方に開けてきた。この森と野原のさらに先には、明るく揺らめき、自分の方へと招くような遠景の無窮の広がりが見えた。ピエールは空を、遠ざかりながらまたたく星々の奥行きをちらりと見上げた。「そしてこれはすべて私のものだ、これはすべて私の中にある、これはすべて私なのだ」とピエールは考えた。「そしてこのすべてを彼らは捕まえて、板で囲まれたバラックに閉じ込めたのだ」彼は微笑み、床に就こうと仲間の方へと歩き出した。

まさに、ピエールの存在は、何もせずして歴史的次元、そして宇宙的次元にまで増大し、捕虜から解放されると、その存在の豊かさを他者にも還元する。

作家は、ナターシャの姉ヴェーラとその夫ベルグを生の実感を持たない人物として描き、

彼らがただ他者の模倣によって生活する様を露骨に描き出すが、それは 1812 年という特別な時においても変わらない。

Он 1-го сентября приехал из армии в Москву.

Ему в Москве нечего было делать; но он заметил, что все из армии просились в Москву, и что-то там делали. Он счел тоже нужным отпроситься для домашних и семейных дел. (11, 313)

彼は 9 月 1 日、軍隊からモスクワへとやって来た。

彼には、モスクワですべきことなどなかったが、皆が軍隊からモスクワに帰りたいと願ひ出て、そこで何かをしていることに気が付いたのだった。彼もまた、家の者と、家族の用事のために出かける許可をもらう必要があると考えたのである。

そしてこのベルグという人物は、すべての人々がモスクワ放棄という非常事態にあつて、日常とは異次元の状況に置かれているなか、妻のために小だんすを購入するという極めて日常的な、瑣末な発想しかできないでいる。模倣によって生きる者の行為は、無意味で空虚な所作となり、他者に不快感しかもたらさない。このような空虚な行為を繰り返すことが生だと考える者は、時代の息吹を肌で感じる事ができず、瑣末な世界の捕虜という身分から存在を昇華させることができないのである。

しかし、祖国戦争の過程で、最も重要な意味を持つのは、ロシア軍最高司令官クトゥーゾフの無為であろう。活動的で戦闘に積極的なナポレオンに対し、クトゥーゾフは会議中も居眠りをし、戦闘をせずただ待っているかのようであり、その無為を象徴する彼の思考が作家によって強調されている。

«Они должны понять, что мы только можем проиграть, действуя наступательно. Терпение и время, вот мои воины-богатыри!» думал Кутузов. (12, 111)

「こちらから攻撃的にいけば、我々には負ける可能性しかないということを、彼らは理解すべきだ。忍耐と時間こそが私にとっては勇敢な戦士なのだ」

個々の肯定的人物達は、無為や戯れの中で 1812 年を迎え、やはり無為の最高司令官と共に、その存在の照準をより大きなものに合わせて、勝利へと向かっていく。

4. 活動からの解放

すでに言及した通り、何らかの活動に従事している時に「何のため」という疑問を募らせるピエールに対し、アンドレイ公爵は、こうした疑問を、つまり生と直面するのを避け

るために活動に従事する。彼は、ナポレオンにとってのトゥーロンのような英雄的行為を夢見るが、実際に彼が英雄となるのは、クトゥーゾフやスペランスキーのような重要な立場にある人物のもとで仕事に従事する時ではない。クトゥーゾフやスペランスキーには、幻滅を覚えることすらあり、クトゥーゾフの方は、その仕事熱心さゆえにアンドレイ公爵に嫌気がさしている。アンドレイ公爵が、作者によって英雄の地位に押し上げられるのは、むしろ、彼がいかなる活動からも解放されている時である。

アウステルリッツの戦場で負傷し、仰向けに倒れたアンドレイ公爵は、まさにその活動能力を奪われた状態で空を目にする。地上で醜く動き回る人間と違い、静かに雲が流れゆく空を目の当たりにし、彼は活動によって失っていた子供特有の自然人的本質を回復し、それゆえ、英雄と考えていたナポレオンの卑小さに気がつく。一命を取り止めた公爵の帰還後、妻リーザは出産の末、死去する。自身の活動を邪魔する存在として冷淡に接してきたリーザが死後も見せる子供のような表情は、ようやくアンドレイ公爵の心に作用し始める。彼は、一度、活動能力を奪われて無為の状態に置かれ、子供特有の本来の人間性を回復したことで、リーザのうちに、自身と同じ価値を持つ人間をようやく見出したのである。さらに、活動能力を奪われたのみならず、死の淵から生還したことで、赤ん坊の病にも心を痛み、その回復に際しては、冒頭で描写されるこの人物の性格からは想像できないほどの感動の念に捉われている。まさに無為という子供特有の状況に置かれて初めて、他者を活動の質によって評価することを止め、存在自体に価値を認めることができるようになったとすることができるのである。

領地経営に携わりながらも、2年間にわたり「生活の激動 (водоворот жизни)」から遠く離れて村で生活していたアンドレイ公爵は、後見人の用事でロストフ家を訪問する。そこで馬車を駆け寄ってきたナターシャを見た彼は、心の痛みを覚え、「彼女は何をそんなに喜んでいるのだ。彼女は何を考えているのだ。(Чему она так рада? о чем она думает?)」(10, 155)と自問する。そして、ロストフ伯爵によってほぼ無理やり宿泊することになってしまった彼は、手持無沙汰で過ごす夜、空を飛びたいと望むナターシャの声を耳にし、ナターシャを始めとする他者との関わりを切望するようになる。

さらには、ナポレオン軍との最後の決戦であるボロジノの戦いで致命傷を負い、身体的活動能力をほぼ完全に奪われると、それまで決闘を挑むために追いかけて来たアナトールをも許せる心境に達する。公爵は、活動能力を奪われる度に、そしてその度合いが深刻であればある程、他者との関係性を必要とし、身内、他者、敵という具合に愛情の対象を拡大していく。ピエールは無為の状態、ナターシャは戯れながら、精神的变化を経験し、その存在の質を変容させてきたが、アンドレイ公爵は、まさに活動能力を失う度に主人公として現れ、精神的変容を経験する。それに伴って、彼にとっての他者の意味も変容していくようだ。

ところで、ナターシャの空を飛びたいという願いや負傷したアンドレイ公爵の夢に現れる「ふわふわとした建物」の動きには、いずれも上昇への志向が見られる。マルドフは、「生の頂きへの渴望は、人々が従事するまぼろしの活動とは両立し得ない」と述べている。本来、生の頂きへの渴望は人間に特有のものであるが、実生活においては、多くの人々がこの渴望とは無縁であり、ただ強い精神の持ち主のみが、常に生の頂きに向かって進むことができる。トルストイが描き出すのは、天によって人間の魂に備えられたより高みに上昇しようという望みであり、彼は書くことで人のうちにある生の頂きへの渴望を呼び覚ますというのだ。⁷ 肯定的な人物の多くが、或いは特定の仕事を持たず、或いは有益なことを何もせず暮らしているのは、まさに彼らが生の頂きを志向しているからだといえるだろう。

ナターシャらと狩猟に興じる彼らのおじさんもまた、仕事に従事していない。

- Так-то вот и доживаю свой век... Умрешь, - чистое дело марш – ничего не останется. Что ж и грешить-то!

Лицо дядюшки было очень значительно и даже красиво, когда он говорил это. Ростов невольно вспомнил при этом всё, что он хорошего слышал от отца и соседей о дядюшке. Дядюшка во всем околотке губернии имел репутацию благороднейшего и бескорыстнейшего чудака. Его призывали судить семейные дела, его делали душеприказчиком, ему поверяли тайны, его выбирали в судьи и другие должности, но от общественной службы он всегда упорно отказывался, осень и весну проводя в полях на своем кауром мерине, зиму сидя дома, летом лежа в своем заросшем саду.

- Что же вы не служите дядюшка?

- Служил, да бросил. Не гожусь, чистое дело марш, я ничего не разберу. Это ваше дело, а у меня ума не хватит. Вот насчет охоты другое дело, это чистое дело марш! Отворите-ка дверь-то, - крикнул он. - Что ж затворили! (10, 265)

「こんな調子で残りの人生を生きていくのさ……だって死んだらな、なにも残らないってわけよ。罪を犯すこともねえ」

おじさんがこう言った時、その顔はとても意味深げで美しくすらあった。ロストフは、この時思わず、父や隣人たちからおじさんについて聞いたよい話をすべて思い出した。おじさんは、県の近隣全域で、非常に高潔で欲のない変わり者だと噂されていた。彼は、家庭の問題を裁くために呼ばれたり、遺言執行者に任命されたり、秘密を打ち明けられたり、判事や別の役職に選ばれたりもした。しかし、彼は常に社会的職務は固辞し、春と秋は農地で自分の薄栗毛の去勢馬に乗って過ごし、冬は家で、夏は生い茂った自分の庭で過ごすのだった。

⁷ *Мардов*. Лев Толстой. С. 8-9.

「どうしておじさんは勤めないのですか」

「勤めてはいたけど辞めたよ。合わないってわけよ。訳が分からねえんだ。これはあんたがたのすることだよ。わしには頭が足りなくてな。でも狩りとなったら、全く違うってわけよ。扉を開けておくれ」と彼は大声で言った。「なんで閉めたんだい」

自然の中で暮らすおじさんは周囲からの信頼も厚く、人助けはしながらも、社会的な地位に直結する仕事には就こうとしない。まるで、仕事に就くことが「罪を犯す(грешить)」ことだと考えているようだ。仕事に就かないこのおじさんは、その口癖である「チースタエ・ヂェーラ・マルシュ(Чистое дело марш)」を頻繁に繰り返す。和訳が難しく、具体的な意味を持たない口癖として処理されてしまいがちであるが、藤沼貴はこれを、「きれいさっぱり、行くぜ」⁸と訳出している。これは、ほぼ直訳だが、従来の翻訳と違い、「きれいさっぱり」という表現によって仕事に従事しないがゆえの良心のくもりなさを示唆する。彼は、御者によるバラライカの演奏がよく聞こえるようにと、扉を開けるよう要求する。『戦争と平和』において、扉は、しばしば生と死の境界のイメージを喚起する。扉を開けることで音楽がよく聞こえる様は、アンドレイ公爵が死の前に「ピチ・ピチ」、「チ・チ」という音を聞き、ペーチャがやはりパルチザン戦で死ぬ前に見た夢が音楽的であったこととも関係するのではないか。「ふわふわとした建物」がそれに合わせて伸びていく「ピチ・ピチ」、「チ・チ」という音、ペーチャの夢の世界で伴奏をなす「オジグ・ジグ」というサーベルを研ぐ音、そして「きれいさっぱり、行くぜ」は、いずれも清らかな曇りなき精神状態で「生の頂き」へと向かう合図でもあるかのようだ。この後に続く場面で、ナターシャはおじさんのギター演奏に合わせて踊りを披露するが、やはりこの目的を伴わない、いわば限りなく無為に近い戯れという行為によってロシア的精神を放出し、聞き手たちを身分差に関係なくその空気に包み込む。これは、いわば日常から非日常を創出する行為であり、充ち溢れんばかりの生の感覚を分け隔てなく周囲に伝達し、人々を生の頂きへと上昇させる。

ルソーは、『新エロイズ』で、山を登ることで地上的な卑しい感情から解放され、より高く天に近づくにつれて、魂が浄化される様相を描き出し、⁹『孤独な散歩者の夢想』において、宇宙との一体感を得るために湖のほとりで寄せては返す波の音を聞く主人公を登場させる。¹⁰しかし、『戦争と平和』の主人公には、魂の浄化や自然・宇宙との合一に達するために、水辺まで散歩したり、山登りをしたりする必要はない。ただ、現実生活に関わる目的をもった活動から解放されるだけで主人公たちは「生の頂き」へと近づくようだ。

⁸ 藤沼訳『戦争と平和』210-254頁。

⁹ ルソー(安土正夫訳)『新エロイズ(一)』(岩波書店, 1986年), 126頁。

¹⁰ ルソー(今野一雄訳)『孤独な散歩者の夢想』(岩波書店, 1973年), 85-86頁。

結語

藤沼貴は、『戦争と平和』の課題の一つとして、トルストイの階層のルーツを示すこと、さらに一まわり大きな課題として、調和の世界の探求を挙げている。¹¹ 冒頭でも述べたように、この作品は、そもそも、農奴制の廃止という制度的変革を行動によって実現しようとしたデカブリストを描く小説として構想されていた。それが、時代背景を遡るうちに、ナポレオン戦争とそこに通じる 1805 年という時まで辿り着いたのである。1812 年という歴史的瞬間に無数の人間がそれぞれ何らかの行為を為していたことはいまでもない。しかし、クトゥーフを始めとする『戦争と平和』の人物たちを見る時、デカブリストの時代から 1812 年へと舞台を移すことで、「行動による変革」から「行動によらない調和」へと作品の中心的テーマが移ったと考えることも可能なのである。

捕虜となったピエールは、「人間は幸福のために創造されており、幸福は人間自身の中に、そして自然な人間的欲求を満たすことにあり、すべての不幸は不足ではなく余剰によって生じる」(12, 152) のだということを知り、その存在によって理解する。

トルストイは、人々から仕事や種々の活動という人間の本質を覆い隠す過剰なものを剥ぎ取ることで、人間の内面的ルーツを追求したといえる。それは無為や戯れを日々の生活の中心とする、人間の本源的な子供の特質にも通じていく。「人間は活動する時、常にその活動の目的を考え出すものである」(12, 115) とトルストイは言う。つまり、活動する時、最も重要なのは活動そのものではなく、その先にある目的となる。しかし、活動しなければ、人間の精神はどこか遠くにある目的ではなく現前する時に向けられる。まさにそうすることで、人間の精神は生の頂きに近づく可能性を獲得し、現前する時の価値は倍加するのである。

¹¹ 藤沼貴『トルストイ』(第三文明社, 2009年), 282-283頁。

Изображение праздности в романе Л. Н. Толстого «Война и мир»

Сильвия Какубари

Данная статья посвящена анализу особенностей бесцельного поведения главных персонажей эпопеи Л.Н. Толстого «Война и мир».

В сравнении с таким персонажем, как Василий Курагин, который всегда – и во многом бессознательно – стремится к достижению своей цели, Пьер Безухов и Наташа Ростова отличаются своими праздностью и поведением без определенной цели. Даже после наступления исторического момента 1812 года, Пьер пребывает в праздности, а Наташа продолжает наслаждаться жизнью, подобно играющему ребенку. Впрочем, в таких необычных обстоятельствах эти два героя начинают оказывать положительное влияние на более широкий круг людей. Вместе с бездействующим главнокомандующим русской армии Кутузовым, они приводят страну к победе, а людей – к согласию.

Даже князь Андрей, человек деятельный и стремящийся к героическому подвигу, становится подлинным героем только тогда, когда лишается возможностей действовать, восстанавливая, наконец, внимание к окружающим его людям.

В «Войне и мире» прослеживается стремление к вершине жизни только у персонажей, освобожденных от какой-либо повседневной занятости; оно часто проявляет себя в виде поговорки, фантастических звуков или музыкальной фразы.

Рассматривая жизнь праздных персонажей, можно, тем не менее, обнаружить подлинную сущность человека, сотворенного для счастья, что и желал изобразить писатель.